

百怪—自然の怪 1 4 話—

annmin

「豪雨」

東北の遠縁の方から聞いた話。
子供の頃、母と一緒に里帰りしていた彼は、
実家の人と山菜採りに行く事になった。
しばらく山を登っていくと、急に雲行きが
怪しくなり、雨が降ってきたかと思うと
たちまち豪雨になってしまった。
季節は晩夏で、夏でも1日雨が降れば急激に
冷えるので、ストーブがすでに出されている
ほどだった。
山菜採り一行の中で一番若かった彼は、一足
先に家に戻り、ストーブに火を入れておく
ように言われた。
びしょ濡れになりながらも実家へと走り、
玄関を開けたところ、彼の母親がいた。
「どうしたの？」
聞くと、家の誰も山菜採りに行ってないし、
彼を誘ってもいないという。
玄関を振り返った彼の目に、都会のような
強烈な陽差しが飛び込んできた。

「片手」

「ちょうど梅雨の時期ですね。

あの時も雨が降っていて……」

都内で配送のアルバイトをしている女性から聞いた話。

彼女がまだ幼稚園くらいの頃、法事があり親戚一同集まった事があった。

「実家は高知の方だったんですけど。

どちらかと言うと、実家の近場に温泉があって、そこに行くのが楽しみだったんです」

法事後、親戚の大半は温泉に出向く。

しかし子供はのぼせるのが早い。

彼女も例にもれず10分ほどで出て、ほてった体を冷やしていた。

温泉の近くにはちょっとした雑木林があり、それを思い出した彼女は、母や大人が出てくるまで、と1人林の中へ向かった。

「その時は雨も小雨だったので。

でも、林に入ると」

ポツポツと振り出した雨は、やがて本格的な降りとなった。

雨宿り出来る場所を探そうと動き回るうち、林の中で迷子になってしまったという。

「温泉施設まで100メートルも無かったんですけど、その時は慌ててしまっ

て泣きそうになっていると、ふと雨が止んだ。しかし雨音は続いている。

不思議に思って空を見上げると、傘が目に入った。

「当時マンガであった、囲碁の人みたいな。

昔風の着物を着た人が、傘をさしてくれていました」

その人は手を差し伸べてきた。

その手をつかむと、ゆっくりと歩き出した。

「一瞬しか顔を見れなかったんですけど……

女性か男性かわからないくらい、中性的な顔立ちをしていて」

やがて温泉施設が見え、お礼を言おうと

その人を見上げた時、すでに姿はなく、

片手にハナショウブを握っていただけ
だったという。

「だから私は、あのマンガの攻めと受けには
人一倍こだわりがあるんです」
言わなくてもいいこだわりを言って、彼女は
そう締めくくった。

「帽子」

山登りが趣味の年配の人から聞いた話。

登山といっても本格的なものではなく、春から秋にかけて年4、5回くらい登る程度のものだという。

ある時、偶然山のふもとに住む人と一緒に登る機会があった。

その人は山の所有者ではないが、いわゆる木材を管理しており、パトロールと山林の手入れを兼ねる仕事をしていたという。

「まあそんなに高い山でもないし、半日で登って下りてきたんだけど」

ふと気付くと帽子が無くなっていた。

どこで落としたのかと、また元来た道を帰ろうとすると、同行者がそれを止めた。

「山で無くした物は探すな、そんな事も知らないのかって注意された」

聞くと、基本的に山の中で無くした物はそこの神様の物になるのだという。

もし探そうとすると、怪我をしたり道に迷わされたりする目にあうと—

「もし、見つかるまで探そうとすれば？」

そう質問すると困った顔をして

「アンタ、神隠しって言葉知ってるかね？」

それ以上の質問はしなかった。

「足跡」

ある大学の登山部の顧問から聞いた話。

「姿は見なかったんだが」

そう断りを入れて話し始めたのは、まだ彼自身が学生の頃の出来事だった。

冬山ではあるが、それほど標高は無い山に一人でアタックをかけていた時の事。

吹雪いてきたので、様子見のためにテントを張った。

結局、吹雪は一晩続いたが、翌朝は快晴となってアタックを再開する事に。

「いざ、って時に気付いたんだ」

テントの近く、そこから大きな犬のような足跡が、点々と続いていた。

最初は小熊かと思ったらしいが、その山に熊が出るなんて聞いた事も無い。

その気になれば1両日中には下山出来る山なので、興味がわいた彼はその足跡を追っていく事にした。

「だが、追っていくうちに妙な感じがしてなあ」

最初は小熊かと思間違ふほど、大きな足跡だと思ったが、それがいつの間にか普通のサイズになっている。

追っていくうちに、それが段々と小さくなっている事に気付いた。

やがてそれが小型犬サイズになり、そして棒で突いたような小さな穴となっていく。

そして何も無いような広い雪原で、それは点となって消えてしまった。

「それでお終いだっただけだな。

あまり面白くも無いだろうけど」

東京近郊の、電車で2時間もかからない山だったそうだ。

「指導」

役所に勤める知人から聞いた話。

以前林野庁絡みの仕事をした時に、その人から面白い話を聞いたという。

仕事柄、彼らもやはり現場で不思議な体験をする事があるらしいが、そういった場合に対処はどうしているのか、興味本位で聞いたそう。

「業務に関係無ければ、基本的に無かった、もしくは見なかった事になる」

少し前、と言っても戦後しばらくまでの頃だが、その頃はきちんと記録も取っていたようだ。

北海道あたりはその手の書類だけで、何冊か本が出来るほど、不可思議な記録が残っていると、その人はそう言っていた。

「記録に残さなくなったのは、指導か何かで？」

それも聞いたが、単に全国規模で珍しい話ではなく、いちいち構ってられないというのが真相だろう、との事。

「まあ何か話があったら聞いてきてやるけど……」

困ったような顔になる知人に、何があるのか聞くと、

「何ていうか、もう不思議な事とは思ってなくて、返って話を聞こうにも何にも無いって向こうに言われるだけとか……」

教訓：本当に怖いのは人の慣れ。

「小船」

茨城の海沿いに住んでいる遠縁の老人から聞いた話。

「60年あの場所に住んでいたが、

見たのは5、6回ほどだな。

子供の頃しか見なかったが」

何の事かと聞くと、よく浜に船が流れ着くという。

普通の船も年に何度か流れ着くから、別に珍しい事ではないが、と前置きして

「小さいんだよ。

船がさ。

プラモデルみたいに、小さい船が

流れ着く事があったんだ」

だから、もしかしたらもっとあったのかも知れないと語った。

今の船ではなく、教科書で見たような昔の日本風の船だったという。

最初にそれを見つけた時、持ち上げるとヒモが付いていて、その先にはちゃんと小さなイカリがあった。

よく出来た玩具だなあ、と家に持ち帰ったところ、父親、特に祖父に酷く怒られたという。

「祖父が『この船はイカリを下ろしてあったんだろう。この船は流れてきたんじゃない。停めてあっただけだ。すぐに元の場所に戻してこい』って」

確かに、浜辺とはいえ少しは浮かぶ水深にその船はあった。

怒られた彼は、慌てて元の場所へ行って船を海に浮かべ、すぐに家へと帰った。

「祖父に、後であれは何かと聞いたんだけどな。

“触れなくてもいい物に、うかつに触れたり近寄ったりするな”

とだけ言われたよ」

それから何度か小船を見かけたが、祖父や父が怖くて、見かけるとすぐに家に帰ったという。

「見たのは子供の頃だけですか？」
祖父や父親もそうなのだろうか？ そう
疑問がわいたので質問すると、
「俺が高校入る頃かなあ。
その浜辺一帯全部で何か埋め立て工事
やってな。
……それ以来見てない」
父も祖父も亡くなった後、じっくり見て
やろうかとも思ってたんだけどな、そう
言って彼は悔しがった。

「声」

実家が栃木県にある、初老の女性の話。

若い時に上京し、そこで後の夫となる男性と知り合ったのだが、こんな話をしてくれた。

「夫の家は代々、東京生まれの東京育ちでしたから。

江戸っ子というんですか。

ですから、最初は相手の両親にすごく反対されましたよ」

とにかく、自分を田舎者とする態度が常に鼻についたという。

彼の方はそんな事は無かったが、意図的では無いにしろ、気を抜くと何かしら小ばかにしたような対応になっていたそう。

「悪気は無いんでしょうけどねえ。

今はそんなの残ってないんでしょうけど」だが、ある時を境にそんな夫の態度が一変。田舎者扱いする事も、江戸っ子ぶる事も一切無くなった。

「結婚もして、私の実家にも何度か一緒に里帰りしてたんですよ。

で、まだ子供が生まれてない頃でしたっけ……」

一緒に実家の周囲を散歩していると、また彼が小ばかにしたような態度を取り始めた。その時は実家に帰って気が強くなっていたのか、彼女はそれに怒った。

最初はふざけ合い程度だったのだが、段々口ゲンカに発展し—

「そしたらね、いきなりあの人が『あ』とか言ったと思うと、辺りをキョロキョロ見回し始めて。

で、私の腕をしっかりとつかんで、実家まで急いで帰ったのよ」

実家に着くと、彼女とその両親に対して人が変わったように接するようになった。両親の言う事は良く守り、彼女に対しては常に優しく、その変わり様は家族親戚一同驚いた程であったという。

「どうしたの？ 何があったの？」

東京に戻る日に彼女は聞いてみた。

聞くと、口ゲンカしている最中に声というか音という音が全くしなくなった。

いきなりの無音状態で、その出来事に彼が驚いていると、

「そんなに言うなら、返してくれんか？」

と声が聞こえたという。

どこから？ と聞くと、1人の声みたいだったけど、ぐるりとあらゆる場所から聞こえたそう。

慌てた彼は彼女の腕をしっかりとつかみ、実家まで逃げ帰った。

「後で父に話したら、『そりゃ俺のセリフ

なんだがな』と笑っていましたっけ」

もうすぐ孫が生まれるから、必ず実家で生ませる、とシワの刻まれた顔に笑顔を浮かべ、意気込んでいた。

「爆竹」

母方の実家が秋田の人のお話。

子供の頃は、夏休みになるとそれこそまるまる1ヶ月、その実家に帰省していたという。

その村は坂の下と上に駄菓子屋というかよろず屋があっただけ。

たいていのお菓子や生活必需品はそこで買う事が出来たという。

ある夜、地元の友人と一緒に花火で遊ぶ事になった。

坂の下のよろず屋の近くで、足りなくなったらそこで補充するつもりで、仲間と一緒に花火を楽しんだ。

「一通り終えてから、もう少しやろうと
僕1人で補充分を買いに行ったんです」
近くと言っても、花火をしている場所からよろず屋まで、直線で50メートルは離れている。

外灯はあるが、田舎の外灯は間隔が都会のそれとは全く違う。

それでも、振り返れば視界の中に仲間の姿は見えるので、時々後ろへ振り向きながら、彼はよろず屋へと入った。

「中でいくらか花火を買って、外へ
出たんですが」

何か後方がやけに明るい気がした。
視線はすでに仲間たちの元へ向けられている。

おそろおそろ、後ろへ振り返ると—
そこには、彼の前方3メートルくらいのところで、真っ白な炎が揺れていた。
高さは1メートルくらいあるだろうか。

「そこで店に飛び込めば良かったんでしょう
けど、気が動転していて」

彼は叫び声を上げながら、仲間のところまで一直線に駆けていった。

そこでは、運悪く残りの爆竹を全て処分しようと、火を付けた直後だった。

その爆発と煙の中に、彼は突っ込んだ。

「みんな道路脇によけているから、
変だなあ、とは思っていたんですが」
落ち着いた後、彼は皆に事情を説明したが、
「ウソだー、驚かせようとしたんだろって。
そりゃ、大量の爆竹の中に突っ込んで
行けば驚くだろうけど、そこまで
サービス精神旺盛じゃねえ！ って」
そして、彼は片方のサンダルが脱げている
事に気付いた。
皆で一緒によろず屋まで探しに行ったが、
どうしてもそれは見つからない。
仕方なく、花火をお開きにして家に戻ると—
「玄関の中に片方が置いてありました」
母方の父、つまり祖父にその事を話すと、
「狐か狸だろうが—
まさかそんな事になるとは思わず、悪いと
感じて返しに来たんだろう」
そのサンダルは捨てずに、今でも母方の
実家に置いてあるそうだ。

「お返し」

仏道の間は、基本的に仏道以外の教えを外法（げほう）と呼ぶ。

あまり良いイメージの言い方ではないが、別に敵視して言っているわけではない（人にもよるが）。

私の通うお寺のすぐ後ろは神社で、その神主とも関係は悪くはない。

以前それ関係でお世話になった事があるくらいなのだが、そこでこんな話を聞いた。

「怒られまして」

そう言ったのは、その神主の奥さんだった。

誰に？ と聞くと“神様”だという。

詳しく聞くと、こんな事があったらしい。

夢の中で—夢と知ったのは覚めてからだが、境内で落ち葉を掃いていると、一人の参拝客が見えた。

20代前半か、体はそうだが顔はもっと若く見える女性だったという。

「返しなさい」

女性は奥さんを見つけるなり、そう言ったという。

しかし、返せと言われたところで、その女性とは初対面である。

困惑していると、こう続けた。

「使い過ぎです。少しは返して
差し上げなさい」

何を、と質問しようとしたところで目が覚めた。

今の夢はいったい何だったのだろうと、神主である夫に話してみた。

「使い過ぎ……」

あ、まさか」

夫には思い当たるフシがあったようだ。

それからしばらく、ある若者のために彼はいろいろと動いたらしい。

人脈やツテを総動員して、一週間ほどでそれは落ち着いた。

その若者は、神社の行事を手伝ったり、

その他にも事ある毎に世話になっており、
若手の労働力として重宝していた。

だが、彼に困った事があっても相談に
のってやれるタイミング等が合わず、
つつい放っておいてしまっていた。

「恐らく、その事を言っていたので
しょう」

しかし、神様ならば何とかしてくれても、
と言うと

「神様は神様で何かしているでしょう。
こちらの態度を注意するために現れた
だけで—

“人事を尽くして”、ですよ」

そんなものかと聞いていると、ふと彼女は
神妙な顔になって、

「でもねえ、バッグ持っていたんですよ。

ブランド物の。

あれは間違いなくルイ・○トンでした。

神様にも物欲ってあるんでしょうか」

ルイ・○トン、恐るべし。

「地元」

ある技術者の方から聞いた話。

彼の仕事は、各地に設置された降水量を測る機器のメンテンスで、それこそ関東は様々な場所を往来していたそうだ。

「北海道や九州あたりはわからない。

多分全国規模のモノだから、そっちには
そっちの担当がいるんだと思う」

ある時、湖、というほどの広さではないが、
大きな池の中にある小島、そこにある機器の
メンテナスに向かう事があった。

当然、船か何か出してもらわなければ、
そこへは行けない。

多少風は強かったものの、距離にして
50メートルほど。

さっそく地元の人に、船を出してもらえ
ないかと交渉したらしいのだが—

「全員、断られた。

何か、“今日はダメな日なんだ”とか
何とか言ってた気がする」

それでも予定というものがある。

その中の一人を説得して船を出したが—
結果は散々だったという。

「まずエンジンストップ。

船底から謎の浸水。

それでもエンジンは時々動いたんだが、
全然目的の小島に近付けなかった」

仕方なく引き返して職場の先輩に事情を
電話で話すと、“地元の人間の言う事は
聞け”という答えが返ってきた。

翌日は快晴となり、何の問題もなく
メンテナスは終了したという。

「ダメだ、っていう事には、それなりの
理由があるんだろうけどね」

結局、それがどんな理由かは聞けず、また
メンテナスはその一回きりで他の担当に
なってしまったため、謎のままで終わって
しまった。

それからは、彼は地元の人間の言う事に
耳を傾けるようにしたという。

「祠」

酒屋を営む人から聞いた話。

自営業ではあるが、小さい店ながらも経営は楽ではなく、昔、店を手放すかどうかという瀬戸際にまでなった事があったらしい。

「20年ほど前、あるところから借金して
しまっただけ。

返済期限が近付いていたけど、打つ手が
全くなかった」

ほとんど諦めていて、ただ日常を過ごして
いたという。

いつものように商売をし、日課をこなして
いた。

その日課の中に、庭にある祠（ほこら）の
ようなものにお酒を供える、というものが
あった。

「家を買った時に、荒れてはいたけど
そんなものがあつたんだ。

壊したり捨てたりするのも何だし、
何かの縁と思って」

返済期限が差し迫ったある日、祠の前で
ついグチをこぼしてしまった。

もうお酒を供える事が出来なくなるかも
しれない、今までお世話になりました、
と一

その夜、彼は夢を見た。

杖をついた、異様に頭の長い老人が深々と
頭を下げ、彼に告げた。

「何も心配はいらない、その時が来れば
全て解決するから、そう言っていた」

しかし、金策が好転するでもなく、期限まで
あと一日と迫ったある日。

所用から帰宅してみると、酒蔵や家から、
酒と言わず家財道具と言わず運び出されて
いるのを目撃した。

「契約はあと一日残っているはずですが、と
言ったら、業者も同席していた若いヤツも
目を丸くしていたなあ」

どうやら期日を勘違いして差し押さえして
しまったらしい。

運悪く、というべきかそこに警官がやってきた。

同席していたのは弁護士だったらしく、事の次第を弁解するも、

「だって、それは窃盗の現行犯だよって。

しかも運んでいる最中に壊れてしまったのもあったから、器物損壊も追加で」

結局、警察署で話し合いが行われ、こちらは被害届けを出さない、向こうは借金を白紙にする、すでに運び出した物に関しては、現状復帰の代わりに借金で相殺する、という事で和解した。

その祠は、今も彼の家の庭に置かれ、毎日お酒を欠かさず供えているという。

「ラベル」

前回の酒屋さんから聞いた話。

彼の家ではお酒の流通、つまり売買を行っているわけなのだが、お酒の良し悪しについてこんな事を話していた。

「本物は、商標や絵、つまりお酒のラベルに神経を使うんだ。

本物のそれは、魔除けに近い効果を持つ」
彼も神職からの又聞き、と断って語ったところによると、本当に考えられているそれは、絵や文字、名前がお守りに近いものになるらしい。

「一番すごいのはキ○ンビールとか言ってたな。

創業者がしっかりした人物だったんだろう」

最近の“萌え”ブームとかは効果はどうなんですかね？ と聞くと、

「あれはあれで、別の意味で魂こもって
いそうだが.....

どんな効果があるんだろうなあ」

複雑そうな表情をしながら、彼は苦笑いしていた。

「連鎖」

釣りが好きな年配の知人から聞いた話。

基本的には海や川、湖など釣る場所は選ばないが、その時は車である山中を走っていた。

ふと、開けたところに大きな池が目に入ってきた。

魚の有無はわからないが、取り合えず釣糸を垂らしてみる事にしたという。

浮きが水面に垂直に立ったのを確認すると、ふと周囲に目がいった。

雑草や木々が生い茂り、人があまり入った様子の無い場所という感じがした。

視線を横に向けると、雑草に小さな虫がとまっていた。

何気なく観察していると、そこにトンボが飛んできてその虫を食べてしまった。

虫を食べている最中のトンボを、今度はカエルが飛び掛って口に入れた。

TVなどでは捕食シーンを見かけるが、リアルで見る機会はめったにない。

こんな事もあるんだなあ、と見続けていると、カエルが池に飛び込んだ。

池の中心へ向かって泳いでいくカエルに、長い影が向かっていった。

ヘビだった。

カエルはすぐに追いつかれ、ヘビに丸飲みにされてしまった。

「そこまでくると、さすがにおかしいと感じたよ。何かが起きている、とね」

そのヘビはいきなり水中に没した。

何匹もの何か、魚だろうが、それらがヘビに襲い掛かっていた。

「すぐに釣りをやめて車に戻ったよ」

それ以来、彼は人気の無い場所での釣りは避けるようになったという。

「伝統」

「50や100は人の域、200年経って
それ以上、千年以上は神の域」

文化財や歴史のある建築物の補修・修理を
行っている職人から聞いた話。

「私は手伝いだけですけどね。まだまだ
若いし未熟ですから」

今年で50歳になると言っていたその
男性は、この言葉は師匠からの受け売り
ですけど、と断りを入れた。

「それでも、廃れたり新しい技術に取って
代わられたりして、それで絶えていくの
は仕方無いとは思っているんですが」

ただ、何でもかんでも新しい物に変えたり、
つぶしたりするものではない、という事を
この前実感したという。

東北のある宗教系の建築物の修理を依頼
され、彼はその手伝いのため仲間と共に
現地に向かった。

問題だったのは、中に飾られている物の配置
で、基本的には壁や床を修理した後、完全に
元の配置へ戻さなければならない。

昔は紙に記録したりあらゆる角度から写真を
撮ったりしていたが、今はPCや動画形式で
把握する事が出来るから楽になったそうだ。

「ただその時ね.....

どこかのTVクルーが取材させてくれって
来て、師匠はそれすごく嫌がるんです。

『素人は何するかわからん』って。

あくまでも撮るだけで邪魔はしない、
所有者にも許可は取ったので、と言うんで
撮影を許して作業を続けたんですが」

それは最後の日に起こった。

天井、床、壁—あらゆる修復が終わり、中に
物を戻そうという最終日、彼らが現場に足を
踏み入れると

「.....全部戻っていたんです。

ただね、一目見て順番がもう無茶苦茶。

ただ端から並べ戻した、そんな感じ」

所有者に話を聞くと、例のTVクルーが

最終日だというのならもうとっと戻して
撮影しちゃおう、と勝手に並べてしまった
という。

そして彼らは撮影を終えると、そのまま
あいさつも無く帰ってしまったらしい。

「バカ、が」

彼の師匠がそううめくようにつぶやいた。

残された彼らは一度全て外に出し、

記録通りに元に戻していく作業中、

その連絡は届いた。

「例のTVクルーが乗った専用車が

事故を起こしたって。

でもねえ、みんな『やっぱり』としか

思ってなかったよ」

幸いにも死者は出なかったようだが、現場は

見通しの良い直線道路で、結局は運転手の

過失、という事になったらしい。

「伝統の良し悪しは何と言えん。

廃れるのも壊されるのも古来から

繰り返されてきた事だ。

ただしそれは、確実に“何か”に対して

ケンカを売る行為だ。

それだけは決して忘れるな」

この手の事態が起こると、師匠は必ず

作業の締めにそう戒めたという。